

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：72681

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520077

研究課題名(和文)『カーランダ・ヴューハ・スートラ』の文献学的研究

研究課題名(英文)A Philological Study on the Karandavyuha-sutra

研究代表者

佐久間 留理子(SAKUMA, Ruriko)

公益財団法人中村元東方研究所・その他部局等・専任研究員

研究者番号：60280658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：インドで7世紀頃に成立した『カーランダ・ヴューハ・スートラ』(KV)は、観自在菩薩の説話を述べた経典であり、インドにおける観自在信仰の展開を知る上で貴重な資料である。本研究ではKVの梵語テキスト・データベースの作成及び翻訳研究を行うとともに、梵文と、蔵訳及び漢訳との比較研究を行った。またKVをもとに15世紀頃にネパールで編纂された『グナ・カーランダ・ヴューハ・スートラ』(GKV)とKVとの比較研究も行った。その結果、GKVは、ネパールのスヴァヤンブー仏塔に関する地域の信仰や地域的テキストである『スヴァヤンブー・プラーナ』、さらにヒンドゥー教の強い影響を受けていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The Karandavyuha-sutra which, contains stories of the Buddhist deity Avalokitesvara, was compiled around the 7th century in India. This compilation is valuable material for investigating the development of the cult of that deity in India. We constructed a Sanskrit text database and translated the KV in Japanese. In addition, we compared the Sanskrit text with the Tibetan and Chinese translations. Furthermore, we made a comparative study of the KV and the Guna-Karandavyuha-sutra (GKV), which was compiled around the 15th century in Nepal. The results clarified that the GKV was greatly influenced by the local cult relating to the Svayambhu-stupa and the local text, the Svayambhu-purana, and Hinduism in Nepal.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学仏教学

キーワード：カーランダ・ヴューハ 観自在 観音 仏教説話 梵文写本 ネパール仏教 インド仏教 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

観自在(観音)菩薩の多様な説話を収めた経典『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』(*Kāraṇḍavyūha-sūtra*)は、インドやネパールにおける観自在信仰の展開を知る上で貴重な資料である。

そのサンスクリットのヴァージョンには、①紀元7世紀頃のギルギット写本に基づくメッテ校訂本(1997年)、②ネワール仏教における紀元12世紀のサンスクリット貝葉写本に基づくサマスラミ校訂本(*Vaidya*によって1961年に再版される)、③サマスラミ校訂本に近いヴァージョンに基づいて、紀元15世紀頃、ネパールにおいて再編纂された『グナ・カーランダ・ヴェーハ・スートラ』(*Guna-kāraṇḍavyūha-sūtra*)のローケシュ・チャンドラ校訂本(1999年)、が知られている。

しかしこれらの各ヴァージョンの比較、特にサマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』とローケシュ・チャンドラ校訂本『グナ・カーランダ・ヴェーハ・スートラ』との比較については、これまで十分に研究がなされていない。

サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の校訂には、サンスクリット写本が一本のみ使用されるに過ぎず、また、校訂者が勝手に読み替えた箇所について、脚注が一切付けられていない等、文献学的な諸問題がある。また、サマスラミ校訂本を底本とし、チベット語訳を参照した、スタッドホームによる『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の英訳(2002年)があるが、それは要約的な訳であり、全訳ではない。

このような研究状況において、サンスクリット写本、チベット語訳、漢訳を総合的に参照した、サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』、及び、ローケシュ・チャンドラ校訂本『グナ・カーランダ・ヴェーハ・スートラ』に関する文献学的な研究が必要であった。

2. 研究の目的

本研究では、サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の内容を、サマスラミ校訂本に使用されないサンスクリット写本、チベット語訳、漢訳を参照することによって、可能な限り正確に理解するとともに、それらの各ヴァージョン間の相違点についても把握する。その上で、サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』とローケシュ・チャンドラ校訂本『グナ・カーランダ・ヴェーハ・スートラ』とを比較検討することによって、インド本土からヒマラヤ山麓域のネパールへ、観自在菩薩信仰がどのように展開したのかを、文献学的に考察することを主たる目的とする。なお、この考察に際しては、ネパールの地域的信仰や地域的テキスト、さらに、ヒンドゥー教も視野に入れる。

3. 研究の方法

(1) サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』に使用されないサンスクリット貝葉写本(ヴァレンドラ博物館(バングラデシュ)所蔵写本等)、チベット語訳(北京版 No.784、紀元9世紀初頭訳出と推定される)、漢訳(天息災奉訳『仏説大乘莊嚴宝王経』、『大正新修大蔵経』 Vol. 20, No. 1050, 982-1011年訳出)を比較検討するとともに、それらを総合的に参照した翻訳研究(脚注を付けた和訳)を行う。

この翻訳研究に伴い、『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』のサンスクリット貝葉写本の中、最古層に属するとみられる写本を精査し、それらとメッテ校訂本、サマスラミ校訂本、チベット語訳、漢訳との共通点、相違点等について考察する。

(2) サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』を底本として、サンスクリットのローマナイズを行い、テキスト・データベースを作成する。

(3) ローケシュ・チャンドラ校訂本『グナ・カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の解読作業を行い、サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』との比較研究を行う。その際にはローケシュ・チャンドラ校訂本『グナ・カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の成立背景となったネパールの地域的信仰、即ち、カトマンズ盆地にあるスヴァヤンブー仏塔の信仰、また、地域的テキスト、即ち、紀元14-15世紀頃に成立したと推定される『スヴァヤンブー・プラーナ』(*Svayambhū-purāna*)、さらに、ヒンドゥー教の宗教文化も調査する。

(4) 以上の研究を遂行するために必要な資料(文献、写真等)を蒐集する目的で、国内出張(出張先、国立民族学博物館、東京国立博物館東洋館等)、海外出張(出張先、ネパールのカトマンズ国立博物館、パタン博物館、バクタプール博物館、ロータス・リサーチセンター、ネワール人仏教僧ガウタマ・ヴァジュラーチャーリヤ宅、インド・ラダック地方のチベット仏教寺院等)を行う。

(5) 以上の研究の遂行に際しては、インド・ネパールの宗教文化に関する専門的研究者である、G. ビューネマン博士(アメリカ合衆国、ウィスコンシン大学・言語文化学部教授)、立川武蔵博士(国立民族学博物館名誉教授)、M. ヴァジュラーチャーリヤ博士(ロータス・リサーチセンター研究員)に、適宜、意見を仰ぐ。

4. 研究成果

(1) 『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』のサンスクリット貝葉写本の中、最古層に属するとみられる三本の貝葉写本(ヴァレンドラ博物館所蔵写本、大英図書館所蔵写本、ネパール国立考古局所蔵写本)を精査し、それらとサマスラミ校訂本、メッテ校訂本、チベット語訳、漢訳との共通点、相違点等につい

て考察した。

その結果、メッテ校訂本のギルギット写本にみられるような『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の最古僧のヴァージョンから、サマスラミ校訂本のヴァージョンへと一挙に再編纂されたというよりも、むしろその前段階として、サマスラミ校訂本と比べて省略的表現が多数みられる上記の三本の写本のヴァージョンが先に成立し、その後、観自在の救済力に関する内容、即ち、授記、病氣や悪い境涯の回避、地獄の生類の教化等、が付加され、サマスラミ校訂本のような内容に整えられたと考える方が妥当であるという見解が得られた。

この見解は、今後の『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の写本の系統に関する考察に役立つと考えられる。研究成果の一部は、学会誌（『印度学仏教学研究』第 62 巻第 1 号）において公表した。

(2) サマスラミ校訂本を底本として、同校訂本に使用されないサンスクリット貝葉写本、チベット語訳、漢訳を参照し、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の翻訳研究（脚注を付けた和訳）を完成した。この翻訳研究は、今後の仏教文化史研究にとって、基礎的な資料を提供することになると考えられる。研究成果の一部は、学術雑誌（『東方』28 号）において公表した。

(3) サマスラミ校訂本を底本として、テキスト・データベースを作成した。このデータベースは、仏教で用いられるサンスクリットの語彙、語用検索に役立つと考えられる。

(4) サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』とローケシュ・チャンドラ校訂本『グナ・カーランダ・ヴェーハ・ストラ』との比較研究を行った。その結果、次のような結論が得られた。

後者の成立背景には、スヴァヤンブー仏塔に関する地域的信仰の興隆や地域的テキストの形成、またヒンドゥー教の強い影響があったと推察される。このような状況下で、『グナ・カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の編纂者は、宗教的エリートのみならず、一般の人々を念頭において、通仏教的な三宝に、大乘的要素や中期以降の密教的要素、さらに、ヒンドゥー教的要素を新たに付加するとともに、この三宝を観自在の多様な身体や六字真言と関係づけることによって、より広汎な宗教レヴェルの信者獲得に向けて、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』を再編しようとしたのではないかと考えられる。

研究成果の一部を、学会誌（『日本仏教学会年報』77 号）において公表した。

(5) サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』とローケシュ・チャンドラ校訂本『グナ・カーランダ・ヴェーハ・ストラ』に説かれる「諸天を生成する観自在」と関連する紀元 18 世紀後半のネパール仏教絵画の研究を行った。その結果、この絵画の中央部に描かれた本尊を含む 7 尊の観自在

の一つに、ヒンドゥー教に対する仏教の優位性を示す「諸天を生成する観自在」が表現されていることが分かった。これによって、「諸天を生成する観自在」が、ネパールの地域的信仰において重要な尊格であるという一つの証左を得ることができた。

研究成果の一部は、学術論集（『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社）において公表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 佐久間 留理子、ネパール仏教絵画に見る観自在菩薩、奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集、佼成出版社、査読無、2014、pp. 1108-1117

② 佐久間 留理子、サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の原典批判研究、印度学仏教学研究、査読有、第 62 巻第 1 号、2013、318-322

③ 佐久間 留理子、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の翻訳研究(1)：サマスラミ校訂本第一部第二章、『東方』、査読有、第 28 号、243-255

④ 佐久間 留理子、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の展開とその宗教的背景、日本仏教学会年報、査読有、第 77 号、2012、109-129

〔学会発表〕（計 2 件）

① 佐久間 留理子、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の梵文貝葉写本について、日本印度学仏教学会第 64 回学術大会、2013 年、8 月 31 日、島根県民会館

② 佐久間 留理子、観自在信仰を説く經典に関する一考察：『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』を中心に、日本仏教学会 2011 年度学術大会、2011 年、8 月 30 日、北海道大学

〔その他〕（計 3 件）

アウトリーチ活動情報（一般講演）

① 佐久間 留理子、ヒマラヤの仏教美術、美術文化史研究会、2014 年、3 月 28 日、名古屋市公会堂（名古屋市）

② 佐久間 留理子、ヒマラヤ山麓の仏教美術：諸天生成観音の図像、美術文化史研究会、2013 年、2 月 22 日、名古屋市公会堂（名古屋市）

③ 佐久間 留理子、密教図像について：変化観音を中心に、第 48 回天台宗布教師会中

国・四国地区協議会研修会、2012年、10月
25日、中村元記念館（松江市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐久間 留理子 (SAKUMA Ruriko)

公益財団法人中村元東方研究所・専任研究員
研究者番号：60280658